

# ヨリ比較構文の構造と意味解釈

九州大学大学院人文科学府  
言語学・応用言語学専修  
2019（平成31）年入学  
2LT19207W  
原田祐介

2021（令和3）年1月提出

## 要旨

本論文では、助詞ヨリを用いた日本語の比較構文について、統語意味論を用いての分析を提案する。日本語の助詞ヨリを用いた比較構文というのは、「XはYよりZ」というような形で表される。このような比較構文の意味を考えてみると、主部である **object** の **property** の程度性について、もう1つの **object** を引き合いに出し、2つ **object** を比べることによって示そうとする構文であると言える。本論文では、このヨリ比較構文の意味を踏まえ、ヨリには「比較の参照点」と「度合いを表す表現」の2つを選択する特性を持っており、優劣や差異を決定する **property** を「度合いを表す表現」である **object** に持たせる特性があることを主張する。また、ヨリ比較構文は、「度合いを表す表現」が連用修飾か連体修飾かという違いで、ヨリ句内の空所の義務性が異なってくることや、空の解釈が異なってくる事実から、「度合いを表す表現」が連用修飾か連体修飾かで2種類のヨリがあるということを主張する。「度合いを表す表現」が連用修飾の場合は、比較の対象となる **object** はデキゴト (VP) 同士となり、その度合いはデキゴト (VP) の持つ特性となる。一方で、「度合いを表す表現」が連体修飾の場合は、比較の対象となる **object** はモノ (NP) 同士であり、その度合いはモノ (NP) の持つ特性となっている。そして、これら2種類のヨリを統語意味論による道具立てによって説明し、2種類のヨリのそれぞれ **Lexicon** での登録されている形を提案する。

1. はじめに.....	1
1.1. 導入.....	1
1.2. 統語意味論での「意味」.....	1
1.3. Information Database.....	2
1.4. Lexicon と Numeration.....	3
1.5. Computational System.....	4
1.6. 意味表示と意味解釈.....	9
2. ヨリを用いた日本語の文.....	11
2.1. 「名詞句+ヨリ」の文.....	11
2.2. 「動詞句+ヨリ」の文.....	12
2.3. ヨリの特性.....	13
3. ヨリの基本的な解釈と構造.....	14
3.1. ヨリの Lexicon における指定.....	14
3.2. Lexicon における登録.....	14
3.3. ヨリの Merge 相手が NP になる比較構文の派生と意味表示.....	15
3.4. ヨリの Merge 相手が VP になる比較構文の派生と意味表示.....	18
4. 2 種類のヨリ.....	21
4.1. simple ヨリでは説明できない比較構文.....	21
4.2. 連体修飾 vs. 連用修飾.....	23
4.3. target ヨリの提案.....	25
5. 先行研究との比較.....	29
5.1. 統語からアプローチ.....	29
5.1.1. Operator 移動による分析.....	29
5.1.2. Operator 移動分析の問題.....	31
5.2. 意味からのアプローチ.....	33
5.2.1. 意味による日英比較構文の対比.....	33
5.2.2. ファクトリゼーションでの分析.....	35
5.3. 統語意味論によるアプローチの利点.....	37
6. おわりに.....	37
7. Appendix.....	39
7.1. ジョンはトムより賢い.....	39
7.2. 100 は 1 より大きい.....	41
7.3. リンダがウィルが固定したより頑丈に、戸棚を取り付けた.....	44

7.4. リンダがウィルが購入したより頑丈な戸棚を取り付けた .....	53
--------------------------------------	----

## 1. はじめに

### 1.1. 導入

日本語のヨリを用いた比較構文は、2 つのものを比べ合わせ、そこに認められる異同や差異、優劣について表すものである。一見単純に見えるものの、何と何について比べているかという解釈は非常に難解で複雑である。このような比較の意味をもたらすヨリは、一体どのような特性を持った語彙なのであろうか。本論文では、このヨリを用いた比較構文の難解な意味を正確に捉えるために、統語意味論のアプローチを用いて、ヨリを用いた比較構文の構造と意味解釈を説明していく。本章では、ヨリの分析に用いる統語意味論の位置付けと、その道具立てを説明する。

### 1.2. 統語意味論での「意味」

言葉を研究するにあたり、私たちが直接に観察できるもの、つまり研究の手がかりになるのは、実際に聞き取れる「音」と、1つ1つの語の「意味」や「音」の配列（語順）から得られる「意味」である。統語論においては、1つ1つの語の「意味」とそれらの語が組み合わさった「音（語順）」と「意味」を観察したうえで、語の組み合わせ方についての仮説を立て、その仮説の妥当性の検証を行なっていく。しかしながら、我々が理解する「意味」とは難解なものである。同じ文を受け取ったとしても、人によって理解する「意味」が異なってくる場合もあり、我々は言語で表現されていないことまで理解することもできる。そのため、統語の研究を行っていくうえでは、語と語の配列から生まれる文の「意味」と我々の「知識」や「推論」によって得られる文の「意味」を区別し、統語論の分析対象となる出来上がった文そのものの「意味」がどこまでであるのかを断定しなければならない。また、1つ1つの語の「意味」がわかって初めて語と語の組み合わせ方を考えることができるようになるため、それぞれの語の持つ「意味」も定めていかなければならない。

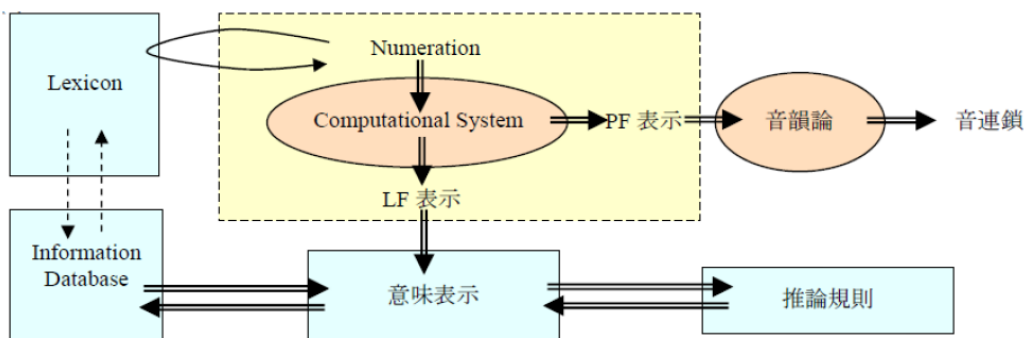
そこで、上山 (2015)では「意味」には次の3つの側面があるとし、これら3つの「意味」の対応関係を反映した統語意味論というモデルを提案している。

#### (1) 「意味」の3つの source

- a. 各語彙項目について **Lexicon** で指定されている「意味」
- b. a.を材料として、**Merge** によって加えられた／変更された「意味」
- c. b.と自分の持つ「情報」を統合して得られる「意味」

[上山 2015: 33, (81)]

(2)



[cf. 上山 2015: 8, (2)]

統語意味論のアプローチとは、Chomsky (1995)以降のモデルを基盤に据えつつ、それぞれの語が **Lexicon** でどのように指定されているのか、語または語と語が組み合わさって出来た文そのものが表す意味はどのようなものか、そして、出来上がった文そのものの意味が我々の「知識」や「推論」によってどのような変化をもたらされるのかを明示的するシステムを追求するものである。

### 1.3. Information Database

**Information Database** (情報データベース) とは、我々の脳内にある「世界知識」が蓄えられているところである。**Information Database** は、人間が思考や推論等を行うためのベースとなるものであり、統語の結果として得られた意味は、この **Information Database** を参照することで解釈される。また、統語の結果得られた意味を **Information Database** に新しく加えることも行なっている。統語意味論では、これらを明示的にするために **Information Database** を次のように形式化している<sup>1</sup>。

(3) a. **Information Database** は、**object** (存在物) の集合である。

{object1,  
object2,  
...}

b. **object** は、指標と **property** (特性) の集合との対である。指標は、単なる数字と

---

<sup>1</sup> 以下、順序集合には<>を、順序が関係のない集合には{ }を用いる。

区別するために、便宜的に大文字の X を先頭に置くことにする。

<X245, {property1, property2, ...}>

- c. property は、attribute (項目名) と value (値) との対である。

<X245, {<attribute1, value1>, <attribute2, value2> ...}>

[cf. 上山 2015: 9, (3)]

Information Database の object には、さまざまな attribute について、その value が書き込まれているものとしている。object には、モノだけでなく、デキゴトも含まれ、複数のモノやデキゴトが 1 つの object を成すこともある。ここに例を挙げておく。

- (4) a. <X19, {<大学生, T>, <Name, ジョン>, <Sex, 男性>, <Age, 20>, ...}>

- b. <X82, {<落とした, T>, <Theme, X53>, <Agent, X19>, <Goal, ...>, ...}>

[cf. 上山 2015: 10, (4)]

モノの場合は(4a)のようになり、(4b)のように object がデキゴトの場合には、意味役割が attribute になり、その参加者が value となる。

#### 1.4. Lexicon と Numeration

次に語彙の集積である Lexicon について説明する。Lexicon とは、語彙項目の集合であり、生成文法では、語彙項目は統語素性と意味素性と音韻素性の束であるとされている。統語意味論においては、Computational System における統語操作を明示的にするために、語彙項目がどのような素性の束であるのかをはっきりと定義している<sup>2</sup>。

- (5) 語彙項目

[統語素性, 意味素性, 音韻素性]

[上山 2015: 14, (7)]

統語素性とは、どのような統語規則がどう適用するのかを決定するものである。この統語素性については、従来の慣習を踏襲し、いわゆる品詞の区別を表す範疇素性はあるものとする<sup>3</sup>。意味素性とは、どの object に property が帰せられるかを指定する id-slot と property

---

<sup>2</sup> 語彙項目は統語素性、意味素性、音韻素性の順序集合として捉えているが、カッコ書が多くなってしまったため、便宜上、[]を用いることにする。

<sup>3</sup> 範疇素性を区別する理由が見つからない語彙項目に関しては、便宜上、範疇素性を「Z」と記す。

の集合の対で表す。上記を踏まえると、Lexicon における語彙項目の一般的な形式は(6)のように表される<sup>4</sup>。

(6) Lexicon における語彙項目の一般形

[{範疇素性, 統語素性, ...}, <id-slot, {property, ...}>, 音韻形式]

[上山 2015: 16, (14)]

発話や文章を書く際、我々は伝達したい内容に基づいて、いくつかの語を組み合わせて文を構築していく。Numeration とは、伝達したい内容に基づいて Lexicon から選ばれた語彙項目の集合であり、指標と語彙項目を対にしたものであると定義されている。

(7) Numeration

{<指標 1, [語彙項目 1]>, <指標 2, [語彙項目 2]>, ...>

[上山 2015: 14, (8)]

その語彙項目の id-slot が「id」の場合、その語彙項目が対になっている指標番号で置き換える。具体的な例として、(8)は Numeration において(9)になる。

(8) Lexicon での語彙項目

[{N}, <id, {<先生, T>}>, 先生]

(9) Numeration での語彙項目

<x1, [{N}, <x1, {<先生, T>}>, 先生]>

なお、本論文では、形容詞を OBJECT 指示表現として扱う。

## 1.5. Computational System

Computational System では、Numeration に対して操作を行う。その代表的なものが、語彙項目を組み合わせていく Merge (併合) と呼ばれる操作である。Numeration に含まれる要素には解釈不可能素性 (uninterpretable feature) があり、Computational System の操作がそれ以上適用できなくなった段階で解釈不可能素性が残っている表示は不適格 (ill-formed) となる。それぞれの解釈不可能素性には、どのような操作を受け、どのような条件で削除さ

---

<sup>4</sup> 上山(2015)において、音韻素性については特に扱っておらず、意味素性の扱いと平行的な方法で扱えること可能性を示唆するにとどまっている。



れるのかが定められている。本論文において用いる解釈不可能素性を以下に挙げておく。

(10) ★

削除規定 Merge 相手の指標で置き換えられる。

条件 property の value の位置に★がある場合、自分が主要部でなければならない。

[上山 2015: 19, (24)]

(11) ★<sub>α</sub>

削除規定 Merge 相手 β が統語素性 α を持っているときのみ、β の指標で置き換えられる。

条件 property の value の位置に★<sub>α</sub>がある場合は、自分が主要部でなければならない。

[上山 2015: 19, (25)]

(12) ●

削除規定 相手 β が主要部として Merge した場合、β の指標で置き換えられる。

[上山 2015: 39, (22)]

(13) +N

削除規定 Merge 相手の範疇素性が N の場合に消える。

[上山 2015: 19, (22)]

(14) +V

削除規定 Merge 相手の範疇素性が V の場合に消える。

[上山 2015: 19, (23)]

(15) +α[β](γ)(δ)

削除規定 αβγδ の指定がある場合には、その条件が満たされたときのみ、削除

される。

$\alpha$  : 相手の範疇素性 (もしくは、相手の統語蘇生)

$\beta$  : Merge-rule

$\gamma$  : 自分が右の要素(right)か、左の要素(left)か

$\delta$  : 自分が head か、 nonhead か

継承規定 主要部からのみ継承される。

基本的な解釈不可能素性は以上である。しかしながら、語と語が意味的に関係を持つのは姉妹関係に限ったことではなく、構造的に離れた位置にある2つの要素が意味的に関係を持つこともある。上で紹介した解釈不可能素性では、このような構造的に離れた位置にある要素同士に意味的な関係を持たせられない。そこで、この構造的に離れた位置にある要素同士を意味的に関係付けるため、東寺 (2015, 2018)にて提案された target 素性というものを導入したい。target 素性は以下に定義される。

(16) ★<sub>target</sub>

削除規定 Merge 相手  $\beta$  が統語素性<target, id>を持っているときのみ、id の指標で置き換えられる。

条件 property の value の位置に★<sub>target</sub>がある場合は、自分が主要部でなければならない。

[cf. 東寺 2015: 35, (24)]

(17) <target, id>

継承規定 主要部からでも非主要部からでも継承される。

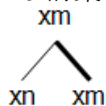
削除規定 Merge 相手の★<sub>target</sub>を置き換えたなら削除される。

[cf. 東寺 2015: 35, (25)]

次に Merge であるが、Merge という操作の一般形は次のように定義される。

(18) Merge

1. Merge base から 2 つの要素  $x_n, x_m$  をとりだす。  
< $x_n$ , [{範疇素性 1, 統語素性 1}, 意味素性 1, body1]>  
< $x_m$ , [{範疇素性 2, 統語素性 2}, 意味素性 2, body2]>
2. 次のような構築物を作り,それを Merge base に入れる。



< $x_m$ , [{範疇素性 2, 統語素性 2}, 意味素性 2, <  
< $x_n$ , [{範疇素性 1, 統語素性 1}, 意味素性 1, body1]>, <  
< $x_m$ , [φ, φ, body2]>  
>]>

Merge という操作は、2 つの要素をとり、それらを構成要素とする上位の要素を形成する操作である。この Merge は、Merge によって生まれた構成要素に対して繰り返し適用することも可能である。Merge が適用可能な対象の集合については、Numeration と区別するために Merge base と呼ぶことにする。

ここで例として、次の Numeration に Merge 規則を適用すると、どうなるのか見ていく。

(19) Numeration

< $x_1$ , [{N, ga}, < $x_1$ , {<Name, ジョン>}>, ジョンが]>  
< $x_2$ , [{N, wo}, < $x_2$ , {<Name, ケーキ>}>, ケーキを]>  
< $x_3$ , [{V}, < $x_3$ , {<食べる, T>, <Agent, ★<sub>ga</sub>>, <Theme, ★<sub>wo</sub>>}>, 食べた]>

この場合、 $x_1$  の統語素性の中に解釈不可能素性「ga」と  $x_2$  の統語素性の中に解釈不可能素性「wo」、そして  $x_3$  の意味素性の中に解釈不可能素性「★<sub>ga</sub>」と「★<sub>wo</sub>」が含まれている。上で述べたように、適切な表示を得るためには、Numeration に含まれるすべての解釈不可能素性が削除されなければならない。まずは、解釈不可能素性「wo」と「★<sub>wo</sub>」を消してみたい。削除規定によると、 $x_3$  に含まれる「★<sub>wo</sub>」は、Merge 相手が統語素性「wo」を持っているときのみ、Merge 相手の指標で置き換えられる。また、「wo」は Merge 相手が主要部で範疇素性が V の場合に削除される。そのため、 $x_2$  と  $x_3$  に対して  $x_3$  を右側かつ主要部として Merge 規則を適用する。

(20) Merge base={x1, x2, x3}

<x2, [{N, wo}, <x2, {<Name, ケーキ>}], ケーキを]>

<x3, [{V}, <x3, {<食べる, T>, <Agent, ★<sub>ga</sub>>, <Theme, ★<sub>wo</sub>>}], 食べた]>

⇒ Merge

<x3, [{V}, <x3, {<食べる, T>, <Agent, ★<sub>ga</sub>>, <Theme, x3>}], <

<x2, [{N, wo}, <x2, {<Name, ケーキ>}], ケーキを]>

<x3, [{V}, φ, 食べた]>

>]>

そうすると、x2に含まれていた「wo」は削除され、x3に含まれていた「★<sub>wo</sub>」も削除規則によって Merge 相手の指標番号である x3 へと置き換えられる。しかし、Numeration にある x1 と Merge によって生まれた x3 には、それぞれ解釈不可能素性がまだ残っている。そこで次に、Numeration に残っている x1 と、この(20)の Merge によって生まれた構成要素 x3 に対して、x3 を右側かつ主要部として Merge 規則を適用する。

(21) Merge base={x1, x3}

<x1, [{N, ga}, <x1, {<Name, ジョン>}], ジョンが]>

<x3, [{V}, <x3, {<食べる, T>, <Agent, ★<sub>ga</sub>>, <Theme, x3>}], <

<x2, [{N, wo}, <x2, {<Name, ケーキ>}], ケーキを]>

<x3, [{V}, φ, 食べた]>

>]>

⇒ Merge

<x3, [{V}, <x3, {<食べる, T>, <Agent, x1>, <Theme, x3>}], <

<x1, [{N}, <x1, {<Name, ジョン>}], ジョンが]>

<x3, [{V}, φ, <

<x2, [{N, wo}, <x2, {<Name, ケーキ>}], ケーキを]>

<x3, [{V}, φ, 食べた]>

>]>

>]>

これで、x1に含まれていた「ga」も x3に残っていた「★<sub>ga</sub>」も削除され、適切な表示が生まれる。

このように、Computational System では、Merge を繰り返し適用していくことで構造構築していくことが基本となる。

## 1.6. 意味表示と意味解釈

Computational System の操作がそれ以上適用できなくなった段階で、解釈不可能素性が残っていないければ、意味の部門と音の部門へ派生が進み、意味の部門では構築した構造の意味素性がそのまま取り出される。LF 表示から意味素性だけを取り出したものを LF 意味素性と呼ぶ<sup>5</sup>。先に派生を行なった(21)から意味素性を取り出すと(22)の LF 意味素性になる。

### (22) LF 意味素性

<x3, {<食べる, T>, <Agent, x1>, <Theme, x3>}>

<x1, {<Name, ジョン>}>

<x2, {<Name, ケーキ>}>

LF 意味素性において、指標番号が同一のものをまとめることにより、意味表示が導かれる。よって、(22)は、(23)の意味表示になる。

### (23) 最終意味表示

{<x3, {<食べる, T>, <Agent, x1>, <Theme, x3>}>,

<x1, {<Name, ジョン>}>,

<x2, {<Name, ケーキ>}>}

これで、「ジョンがケーキを食べた」ということを述べることができる。(23)は、語彙項目を組み合わせた結果表された意味であるが、(3)と並行的な形式になっている。つまり、統語意味論では、言語によって表されている意味を(24)のように考えている。

(24) a. 意味表示は、**OBJECT** の集合である。

b. **OBJECT** とは、指標番号と **property** (特性) の集合との対であるとする。指標は、単なる数字や **object** の指標と区別するために小文字の **x** を先頭に置くことにする。

<x245, {property1, property2, ... }>

c. **property** とは、**attribute** (項目名) と **value** (値) との対であるとする。

<x245, {<attribute1, value1>, <attribute2, value2>, ...}>

[上山 2015: 23, (35)]

意味表示をこのようにして捉えると、**Information Database** と参照可能な状態になる。すな

---

<sup>5</sup> 素性の種類によっては、LF 意味表示を出す段階で統語操作が適用されるものもあると考える。

わち、意味表示の計算がすべて終わると、**Information Database** の知識と参照されること  
よって、**OBJECT** と **object** の同定が起こり、**OBJECT** が持つ **property** が **object** が持つ **property**  
へと加えられるので、**Information Database** の内容が更新されることになる。

本論文は、以上で説明してきた統語意味論に基づいて分析を行なっていく。

## 2. ヨリを用いた日本語の文

### 2.1. 「名詞句+ヨリ」の文

1 章では、本論文で用いる統語意味論によるアプローチとその道具立てを紹介した。本章では、ヨリを用いた日本語の文を具体的に見ていく。日本語には、助詞ヨリを用いた「XはYよりZ」というような比較構文がある。このようなヨリ比較構文は、ある object の property について、もう 1 つの object を引き合いに出し、その 2 つの対象を比べることによって、主部の object が持つ property の程度性を述べる構文であると言える。本章では、ヨリ比較構文の意味を踏まえ、ヨリが「比較の参照点」と「度合いを表す表現」の 2 つを選択する特性を持っており、優劣や差異を決定する property を「度合いを表す表現」である object に持たせる特性があることを提案する。

まずは、ヨリの直前に名詞句が現れている場合の比較構文について考えてみたい。

(25) ジョンは賢い。

(26) ジョンは[トムより (も)]賢い。 [Kikuchi 1989: 1, (1a)]

例文の(25)は、単に「ジョン」という名前を持つ object について、その object は「賢い」ということを述べた叙述文である。それに対して、(26)の「ジョンはトムより (も) 賢い」では、助詞のヨリを用いることによって比較の意味が導入されている。(26)の文は、「ジョン」という名前を持つ object について、その object は「賢い」ということを述べているわけだが、(25)と異なるのは、その「ジョンの賢さ」というのは「トムの賢さ」を上回っているというような意味を表している点である。(26)において、助詞ヨリによって文の構成要素として導入されたものは「トム」であり、この「トム」を引き合いに出すことによって、「ジョン」と「トム」とを「賢さ」という点において比べている。このことによって、「ジョンの賢さ」についての程度性が述べられることになる<sup>6</sup>。その結果、文全体の意味としては、「ジョンは賢い」ということに加えて、その「ジョンの賢さ」は「トムの賢さ」を上回っているということも同時に述べているのである。

では次に、ヨリによって具体的な数値が導入されるような文を見ていきたい。

(27) 100 は 1 より大きい。

(27)の文の意味を考えてみてほしい。「100」という object は「1」という object よりも何ら

---

<sup>6</sup> この点で、ヨリ句というものは、ヨリの係先の述語に対して広い意味での修飾を行っているわけだが、本論では言及はせず、示唆するにとどめておく。

かの点で「大きい」ということが述べられていることがわかる。この(27)の場合も先ほどの例と同じように、「100」の「比較の参照点」として「1」が導入され、「100」と「1」が両者の何らかの点（おそらくは両者の値の「大きさ」）について比べられたうえで、「100」の「大きさ」の方が上回っているということが述べられている。

このように、助詞のヨリによってもたらされる意味を踏まえると、ヨリ比較構文は、ヨリと共に導入された「比較の参照点」となる object について、「度合いを表す表現」である object が示すところの何らかの度合いの程度性が、主部である object と比べられた上で、主部である object の度合いが優っている、あるいは「比較の参照点」である object の度合いが劣っているということが述べられていることがわかる。

このようなヨリ比較構文の意味を統語意味論を用いて表すと、例文の(26)は(28)のような意味表示に、(27)は(29)のような意味表示になると考えてよい。

(28) 「ジョンはトムより賢い。」

意味表示

{<x3, {<賢い, T>, <Theme, x1>, <劣, x2>}>,  
<x1, {<Name, ジョン>}>,  
<x2, {<Name, トム>}>}

(29) 「100 は 1 より大きい。」

意味表示

{<x3, {<大きい, T>, <Theme, x1>, <劣, x2>}>,  
<x1, {<数値, T>, <Degree, 100>}>,  
<x2, {<数値, T>, <Degree, 1>}>}

## 2.2. 「動詞句+ヨリ」の文

ヨリを用いた比較構文には、前節で見たような「名詞句+ヨリ」という形式の他にも、「動詞句+ヨリ」という形式も存在する。次に「動詞句+ヨリ」となっている比較構文の意味を考えてみたい。

(30) [座っているより]立っている方が良い。

この(30)の意味を考えてみると、「座っている」と「立っている」の動作主である object の存在は音として現れてはいないが、その動作主である object について、「立っている」状態が好ましいことを述べていることを述べており、その「立っている」状態が「座っている」状態よりも好ましいことが表されている。この(30)においても、ヨリによって、「座っ



ている」という「比較の参照点」が導入され、「座っている」ことと「立っている」ことが比べられたうえで、「良さ」という動作主の状態の程度性に関して、「立っている」状態の方が優っているという解釈が可能である。

このように、「動詞句+ヨリ」の場合でも、ヨリによって「比較の参照点」が導入されること、そして、比較の対象の何らかの度合いとなる **property** に関して優劣を表すことは、「名詞句+ヨリ」形式の場合と何ら変わることはない。このことから、「動詞句+ヨリ」の(30)も、(28)や(29)と同様の形式で意味表示を記述することができるものとする。

(31) 「座っているより立っている方が良い。」

意味表示

{<x5, {<良い, T>, <Theme, x1>, <劣, x3>}>,

<x1, {<立つ, T>, <Agent, x2>}>,

<x2, { }>,

<x3, {<座る, T>, <Agent, x4>}>

<x4, { }>,

### 2.3. ヨリの特徴

このように、比較構文におけるヨリは、「度合いを表す表現」の **object** と「比較の参照点」を表す **object** の2つを選択する特性を持っていることに加え、「比較の参照点」である **object** に、優劣や差異を決定する **property** を持たせる特性があると言える。このことから、「名詞句+ヨリ」の場合であっても「動詞句+ヨリ」の場合であっても、比べられている「度合いを表す表現」が<劣, xn>という **property** を持っているという形式でヨリ比較構文の意味を表現することができる。すべて同じように、<劣, xn>の **value** に「比較の参照点」がきて、「劣」で表される場所の **property** が比べられている「度合いを表す表現」の **property** として記述することができればよい。

### 3. ヨリの基本的な解釈と構造

#### 3.1. ヨリの Lexicon における指定

前章では、ヨリを用いた比較の文の意味解釈を考えた。比較構文におけるヨリ句の働きを考えると、比較構文におけるヨリは、「度合いを表す表現」の object と「比較の参照点」を表す object の 2 つ選択し、「比較の参照点」である object に、優劣や差異を決定する property を持たせる働きがあることを示した。このことを踏まえ、Computational System において、「度合いを表す表現」の object と「比較の参照点」を表す object を指定し、「比較の参照点」である object に優劣や差異を決定する property をヨリに持たせることができれば、比較構文の意味を適切に表示することができる。そこで、この論文では、Lexicon においてヨリは(32)のように指定されていると主張する。

(32) ヨリ

[Z, {+(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]

ヨリは、最初に「比較の参照点」となる object と Merge し、優劣を決定する property の value にある解釈不可能素性★が、Merge した比較の参照点である OBJECT の指標番号と入れ替わる。次に、度合いを表す表現と併合することによって、ヨリの id-slot (「●」) にその度合いを表す表現の指標番号が入ることで、その OBJECT の property として<劣, ★>で指定した property を記述することができる。ヨリが(32)のように Lexicon において指定されていれば、ヨリの係り先である比較の参照点が<劣>という異同や優劣を決定する property を持っている意味を表示することができる。

#### 3.2. Lexicon における登録

3.1 節では、提案した(32)という Lexicon を仮定することによって、比較構文の意味解釈を上手く捉えることを示した。

(32) ヨリ

[{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]

しかしながら、ヨリの Lexicon における登録が(32)である必要があるのかについて検討を行っていない。ここでは、実際の日本語の比較構文の容認性を考えつつ、ヨリの Lexicon における登録について考えていく。

まず、(32)でヨリの統語素性の 1 つを+(right)(head)と仮定しているのは、ヨリが比較の参照点を指定する際、ヨリは必ず指定したい参照点と句を形成しており、参照点の右側にき

ていなければならないからである。

- (33) a. ジョンは、ビルより太っている。  
b. \*ジョンは、ビル太っているより。  
c. \*ジョンは、よりビル太っている。

ヨリの **Lexicon** において、ヨリが「比較の参照点」を指定する際の語順に関して指定をしておかなければ、ヨリは参照点の右や左に自由に現れてよいこととなり、容認性が低い(33b,c)の構造を生み出してしまうことになる。また、ヨリは「度合いを表す表現」とも Merge し「比較の参照点」に対して自身の **property** も付与させなければならない。そのため、参照点を指定する際は、ヨリ自身が **head** として Merge するのが望ましい。したがって、ヨリが参照点を指定する際の Merge に関しては、+(right)(head)という指定が必要である。

次に、ヨリが何の度合いについて比較するのかを指定する際について考える。ヨリを用いた比較の文の意味解釈を考えると、「比較の参照点」となる **object** の **property** に異同や優劣を決定する<劣>**property** を組み込むことができればよかった。1章で述べたように、意味素性がどの **object** に帰せられるかを指定する働きは **id-slot** が担っている。ここに、ヨリの統語素性に+(left)(nonhead)を加えた理由として、**Lexicon** においてヨリの意味素性の **id-slot** に「劣」の **property** の指標番号を入れることができれば、上手く意味表示を行うことができるからである。

このような指定を行うことで、ヨリが「比較の参照点」と Merge し、「劣」の **property** の **value** に「比較の参照点」の指標番号が入ることで、次に「度合いを表す表現」と Merge した際に、「度合いを表す表現」の **property** に「劣」の **property** が入ることになる。

### 3.3. ヨリの Merge 相手が NP になる比較構文の派生と意味表示

それでは、ヨリを用いた比較表現が具体的に(32)からどのように作られるのか、「ジョンはビルより太っている」という例で順を追って見ていきたい。「ジョンはビルより太っている」の **Numeration** は(34)であるとする。ここでは、ヨリの指定に注目し、派生が上手く行えているのか確認していく<sup>7</sup>。

---

<sup>7</sup> 本論では、ヨリによる指定に直接関わってこない格助詞の Merge やテンスまたはアスペクトの Merge に関しては省略することにする。

(34) Numeration={x1, x2, x3, x4}  
 <x1, [{N}, <x1, {<Name, ジョン>}>, ジョンは]>  
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, ビル>}>, ビル]>  
 <x3, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]>  
 <x4, [{A, +N}, <x4, {<太い, T>, <Theme, ★>}>, 太っている]>

まず、比較の参照点を指定するために、x3 であるヨリは x2 であるビルと Merge する。

(35) Merge base={x1, x2, x3, x4}  
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, ビル>}>, ビル]>  
 <x3, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]>

⇒ Merge

<x3, [{Z, +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, x2>}>, <  
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, ビル>}>, ビル]>  
 <x3, [φ, φ, より]>  
 >]>

次に、度合いを表す OBJECT を指定する Merge を行う。

(36) Merge base={x1, x3, x4}  
 <x3, [{+(left)(nonhead)}, <●, {<劣, x2>}>, <  
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, ビル>}>, ビル]>  
 <x3, [φ, φ, より]>  
 >]>  
 <x4, [{A, +N}, <x4, {<太い, T>, <Theme, ★>}>, 太っている]>

⇒ Merge

<x4, [{A, +N}, <x4, {<太い, T>, <Theme, ★>}>, <  
 <x3, [φ, <x4, {<劣, x2>}>, <  
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, ビル>}>, ビル]>  
 <x3, [φ, φ, より]>  
 >]>  
 <x4, [φ, φ, 太っている]>  
 >]>

この(36)の併合により、ヨリの id-slot (「●」) にその度合いを表す表現の指標番号に入る

こととなり、度合いを表す表現である OBJECT の property の一部として、(35)の併合にて指定された「劣」の property を記述する。

(37) Merge base{x1, x4}

```
<x1, [{N}, <x1, {<Name, ジョン>}], ジョンは]
<x4, [{A, +N}, <x4, {<太い, T>, <Theme, ★>}],
  <x3, [φ, <x4, {<劣, x2>}], <
    <x2, [{N}, <x2, {<Name, ビル>}], ビル]
    <x3, [φ, φ, より]
  >]
<x4, [φ, φ, 太っている]
>]
```

⇒ Merge

```
<x4, [{A}, <x4, {<太い, T>, <Theme, x1>}], <
  <x1, [{N}, <x1, {<Name, ジョン>}], ジョンは]
  <x4, [φ, φ,
    <x3, [φ, <x4, {<劣, x2>}], <
      <x2, [{N}, <x2, {<Name, ビル>}], ビル]
      <x3, [φ, φ, より]
    >]
    <x4, [φ, φ, 太っている]
  >]
>]
```

(37)の意味素性の部分だけを抜き取ると(38)のようになる。

(38) LF 意味素性

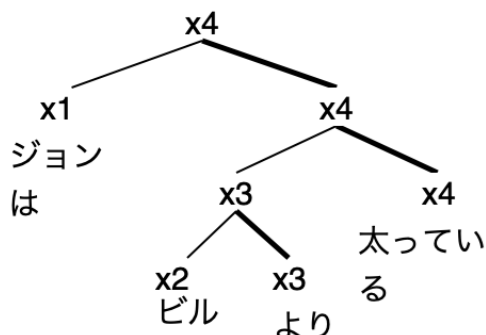
```
<x4, {<太い, T>, <Theme, x1>}>
<x1, {<Name, ジョン>}>
<x4, {<劣, x2>}>
<x2, {<Name, ビル>}>
```

この意味素性の束である(38)において id-slot が同一であるものをまとめたものが(39)となる。

(39) 最終意味表示

{<x4, {<太い, T>, <Theme, x1>, <劣, x2>}>,  
<x1, {<Name, ジョン>}>,  
<x2, {<Name, ビル>}}}

(40) 樹形図



このように、ヨリの Lexicon における登録を(32)だと仮定することによって、ヨリによって表される比較構文の意味を上手く表示することが可能となる。

### 3.4. ヨリの Merge 相手が VP になる比較構文の派生と意味表示

3.2 節では、ヨリは Lexicon において(32)のように指定されていると主張し、3.3 節にてヨリの Merge 相手が NP となっている比較構文において、実際の派生を確認した。

(32) ヨリ

[[Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)], <●, {<劣, ★>}>, より]

しかしながら、2章で述べたように、ヨリの Merge 相手が VP となる比較構文も存在する。以下では、ヨリの Merge 相手が VP となる比較構文について考察していく。

まず、次の文を見てほしい。

(41) リンダが[ウィルが  $\varphi$  固定した]より頑丈に、戸棚を取り付けた。

例えば、(41)の文全体では、「あるものをウィルが固定した丈夫さ」に比べて「リンダが戸棚を取り付けた丈夫さ」の方が多いという意味になっている。ここでは、「固定した」「取り付けた」というそれぞれの VP についての丈夫さ、つまり、VP の度合いがヨリによって比べられているという解釈を行うことができる。

3章では、提案した(32)によって比較構文の適切な意味を派生できるのかについては、ヨリの Merge 相手が NP となる比較構文でしか検証を行っていなかった。そのため、ヨリの Merge 相手が VP となっている(41)のような文においても、(32)によって適切な意味を生み出すことができるのか確認しておきたい。ここでは、(41)の Numeration は(42)であるとし、適切に派生を行い、解釈不可能素性を全て削除できた場合の意味表示を記述しておく。

(42) Numeration={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7}

<x1, [{N}, <x1, {<Name, リンダ>}], リンダが]>

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが]>

<x3, [{V, +N, +N}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, ★<sub>wo</sub>>, <Agent, ★<sub>ga</sub>>}], 固定した]>

<x4, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}], より]>

<x5, [{A, +V}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}], 頑丈に]>

<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}], 戸棚を]>

<x7, [{V, +N, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, ★<sub>wo</sub>>, <Agent, ★<sub>ga</sub>>}], 取り付けた]>

(43) LF 意味素性

<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>

<x1, {<Name, リンダ>}>

<x5, {<頑丈, T>, <Theme, x7>}>

<x5, {<劣, x3>}>

<x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>

<x2, {<Name, ウィル>}>

<x8, { }>

<x6, {<戸棚, T>}>

(42)を派生していき、得られた意味素性の束をまとめると(44)となる。

(44) 最終意味表示

{<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>,

<x1, {<Name, リンダ>}>,

<x5, {<頑丈, T>, <Theme, x7>, <劣, x3>}>,

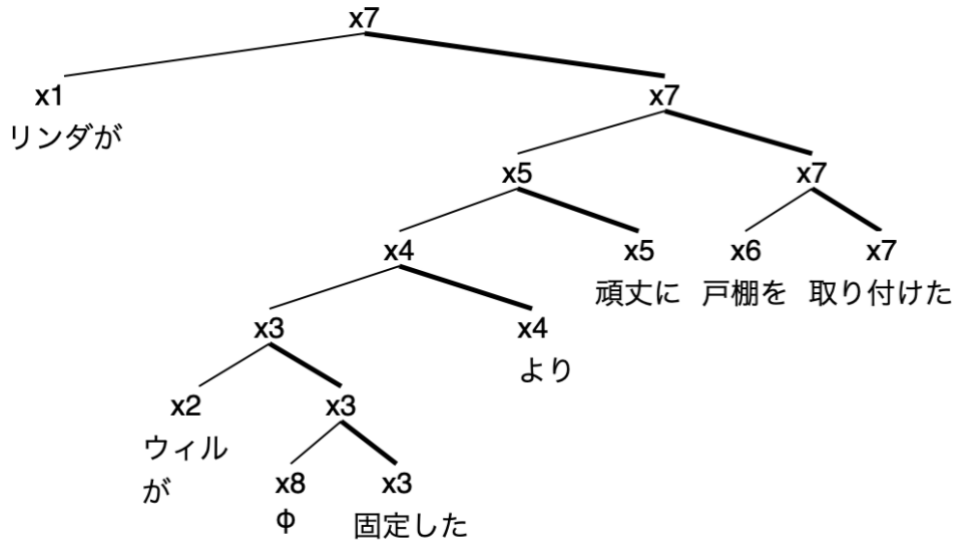
<x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>,

<x2, {<Name, ウィル>}>,

<x8, { }>,

<x6, {<戸棚, T>}>

(45) 樹形図



(44)の最終意味表示から見て取れるように、(41)の例では「ウィルがあるものを固定した丈夫さ」と「リンダが戸棚を取り付けた丈夫さ」とを「頑丈」という度合いにおいて比べており、「ウィルがあるものを固定した丈夫さ」の方が劣っている意味を表すことによって、「リンダが戸棚を取り付けた丈夫さ」の方が優っている解釈を表すことができています。例文(41)のようなヨリの Merge 相手が VP となっている比較構文においても、(32)を用いて、その文が示す適切な意味表示を表すことができた。



## 4.2 種類のヨリ

### 4.1. simple ヨリでは説明できない比較構文

ここで注目したい文が次の(46)である。

(46) リンダが[ウィルが  $\varphi$  購入した]より頑丈な戸棚を取り付けた。

この(46)も(41)と同様に、ヨリの Merge 相手が VP となっている比較構文であるが、(46)においてヨリによって比べられているものは「ウィルが購入した戸棚の堅牢さ」と「リンダが取り付けた戸棚の堅牢さ」である。ここでの「頑丈」という度合いを表す表現を用いて比べられているのは、リンダが取り付けた「戸棚」とウィルが購入した「戸棚」の堅牢さ同士となっている。

この文の意味を考えると、最終的な意味表示を次のように考えたい。

(47) 最終意味表示

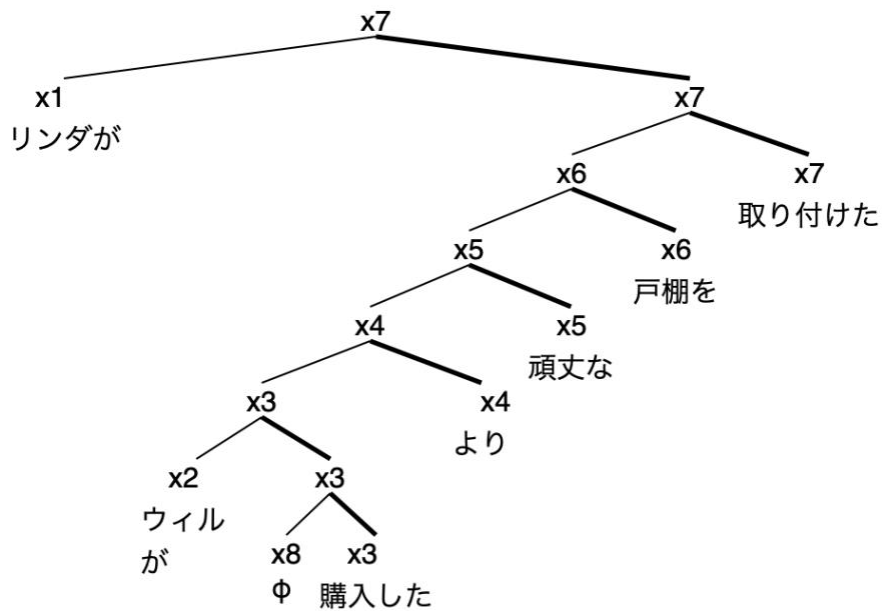
```
{<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>,
  <x1, {<Name, リンダ>}>,
  <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>, <劣, x3>}>,
  <x4, {<購入した, T>, <Theme, x3>, <Agent, x2>}>,
  <x2, {<Name, ウィル>}>,
  <x3, {<戸棚, T>}>,
  <x6, {<戸棚, T>}>}
```

しかしながら、先に提案した(32)を用いて、(46)の文の Numeration を(48)としてうえで、(51)のように Merge を行うと次のような意味表示となってしまふ。

(48) Numeration={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7}

```
<x1, [{N}, <x1, {<Name, リンダ>}>, リンダが]>
<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}>, ウィルが]>
<x3, [{V, +N, +N}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, ★wo>, <Agent, ★ga>}>, 購入した]>
<x4, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]>
<x5, [{A, +N}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}>, 頑丈な]>
<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}>, 戸棚を]>
<x7, [{V, +N, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, ★wo>, <Agent, ★ga>}>, 取り付けた]>
```

(49) 樹形図



(50) LF 意味素性

<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>

<x1, {<Name, リンダ>}>

<x6, {<戸棚, T>}>

<x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>}>

<x5, {<劣, x3>}>

<x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>

<x2, {<Name, ウィル>}>

<x8, { }>

(51) 最終意味表示

{<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>,

<x1, {<Name, リンダ>}>,</p>
</div>

<x6, {<戸棚, T>}>,</p>
</div>

<x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>, <劣, x3>}>,</p>
</div>

<x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>,</p>
</div>

<x2, {<Name, ウィル>}>,</p>
</div>

<x8, { }>}

22

このように、(32)を用いて(46)の派生を考えると最終的な意味表示として、「頑丈」という度合いを表す表現である x5 が取っているものが、NP である x6 であるのに対し、attribute が「劣」となっている property の value には、VP である x3 が入ってくる。(46)の「リンダがウィルが購入したより頑丈な戸棚を取り付けた。」の解釈としては、リンダが取り付けた「戸棚」とウィルが購入した「戸棚」の NP 同士について「頑丈」という度合いにおいて比べられていたわけだが、見ての通り、(32)を用いても意味的に NP 同士を比べている(46)のような比較構文の意味を表すことができないのである。

#### 4.2. 連体修飾 vs. 連用修飾

では、どういった場合に、ヨリの Merge 相手が VP となる比較構文において、比較の対象が NP 同士になるのだろうか。4.2 節で用いた(41)と(46)を並べてみるとその違いに気が付く。

(41) リンダが[ウィルが φ 固定した]より頑丈に、戸棚を取り付けた。

(46) リンダが[ウィルが φ 購入した]より頑丈な戸棚を取り付けた。

(41)と(46)は、一見するとほとんど同じ文であるが、この2つの文は何の度合いについて比べられているのかを表す表現の修飾先が異なっている。この(41)と(46)では、「頑丈」という「度合いを表す表現」が、連体修飾になっているか連用修飾になっているかという点で大きく異なっていることが見て取れる。(41)のように「頑丈」が連用修飾となっている場合においては、比較の対象が VP 同士となり、(46)のように「頑丈」が連体修飾となっている場合は、比較の対象が NP 同士となるのである。

さらに、度合いを表す表現である「頑丈」が連用修飾となっているか連体修飾となっているかという違いだけではなく、この2つの文はヨリ句内の空所の義務性に関しても異なる振る舞いを見せる。次の(52)を見てもらいたい。度合いを表す表現が連用修飾となっている(41)においては、ヨリ句内の空所の存在は、義務的ではない。

- (52) a. リンダが[ウィルが φ 固定した]より頑丈に、戸棚を取り付けた。  
b. リンダが[ウィルが 本棚を 固定した]より頑丈に、戸棚を取り付けた。  
c. ?リンダが[ウィルが 戸棚を 固定した]より頑丈に、戸棚を取り付けた。

一方で、度合いを表す表現が連体修飾となっている(46)では、ヨリ句内の空所の存在は、義務的である。

- (53) a. リンダが[ウィルが φ 購入した]より頑丈な戸棚を取り付けた。  
 b. \*リンダが[ウィルが 本棚を 購入した]より頑丈な戸棚を取り付けた。  
 c. \*リンダが[ウィルが 戸棚を 購入した]より頑丈な戸棚を取り付けた。

(53)の度合いを表す表現が連体修飾の場合では、(52)とは異なり、常に空所がなくてもよいというわけではなく、ヨリ句内に空所が必要となる。(53b,c)のように、空所の代わりに「本棚を」や「戸棚を」としてヨリ句内に比較の対象となっている要素が現れると、その文は容認不可能となってしまう。

そして面白いことに、これら(52a)と(53a)のヨリ句内の空所の解釈には違いが見られる。(52)では、(52a)のようにヨリ句内に空所が存在することも許されるが、これは日本語においてよく見られる空代名詞である。空代名詞であるという証拠としては、(52a)のφの解釈が必ずしも固定していないということがあげられる。例えば、(52a)の文「リンダがウィルが固定したより頑丈に、戸棚を取り付けた。」だけを提示されると、後ろにある「戸棚」に解釈が引っ張られるがゆえ、ヨリ句内の空所の解釈も「戸棚」になるのが普通かもしれない。しかし、たとえば、リンダとウィルは自宅のリフォーム中で、ウィルが「本棚」を買ってきて、それを自分で壁に固定したという話のあとで、リンダについては、ウィルと異なるものを取り付けたわけだが、その頑丈さが上回っている、ということが言いたい場合には、(52a)でヨリ句内の空所は「戸棚」ではない解釈が可能になる。このように、(52a)のφで示すところの空は、それが何を指しているか統語的な制限を受けないことがないので、空代名詞であると考えられる。しかしながら、(53)の場合はどうであろうか。(53a)の場合、(52a)の解釈の説明において示したような文脈に置いてみても、空所が「本棚」に相当する解釈は容認されず、この(53a)における空所は「戸棚」としての解釈しか許されないのである。

次の(54)から(59)の例においても、度合いを表す表現が連用修飾であるか連体修飾であるかで、空所が無い場合の容認性がはっきりと分かれ、連体修飾においては空所の解釈にも制限が見られることがわかる。

#### (54) 連用修飾

- a. トムが[キャシーが φ 書いた]より丁寧に、御礼状を書いた。  
 b. トムが[キャシーが 招待状を 書いた]より丁寧に、御礼状を書いた。  
 c. ?トムが[キャシーが 御礼状を 書いた]より丁寧に、御礼状を書いた。

#### (55) 連体修飾

- a. トムが[キャシーが φ 書いた]より丁寧な御礼状を書いた。  
 b. \*トムが[キャシーが 招待状を 書いた]より丁寧な御礼状を書いた。

- c. \*トムが[キャシーが 御礼状を 書いた]より丁寧な御礼状を書いた。

(56) 連用修飾

- a. マイクが[ヘレンが φ 開いた]より華々しく、パーティを開いた。  
b. マイクが[ヘレンが 結婚式を 開いた]より華々しく、パーティを開いた。  
c. ?マイクが[ヘレンが パーティを 開いた]より華々しく、パーティを開いた。

(57) 連体修飾

- a. マイクが[ヘレンが φ 開いた]より華々しいパーティを開いた。  
b. \*マイクが[ヘレンが 結婚式を 開いた]より華々しいパーティを開いた。  
c. \*マイクが[ヘレンが パーティを 開いた]より華々しいパーティを開いた。

(58) 連用修飾

- a. ジョンが[メアリが φ 買った]よりたくさん、専門書を買ってきた。  
b. ジョンが[メアリが 漫画本を 買った]よりたくさん、専門書を買ってきた。  
c. ?ジョンが[メアリが 専門書を 買った]よりたくさん、専門書を買ってきた。

(59) 連体修飾

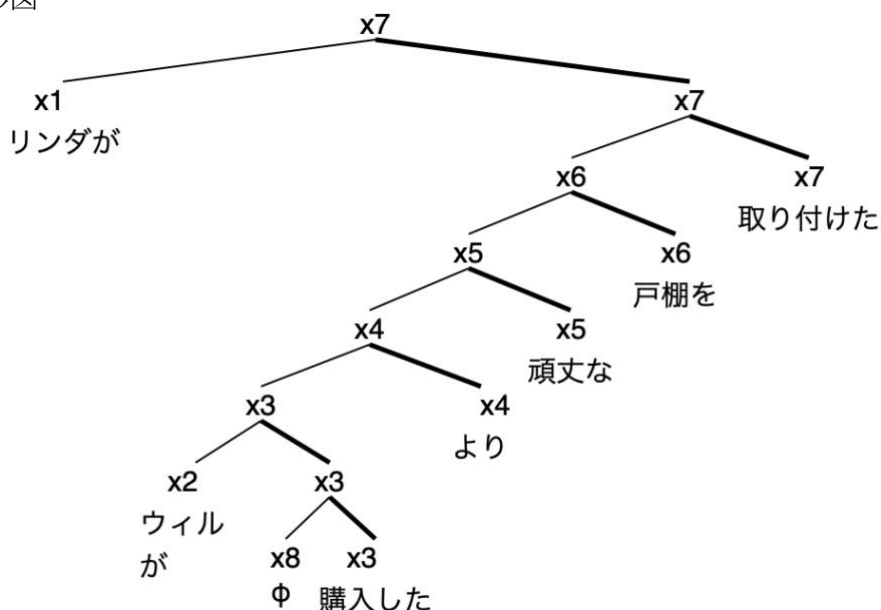
- a. ジョンが[メアリが φ 買った]よりたくさん専門書を買ってきた。  
b. \*ジョンが[メアリが 漫画本を 買った]よりたくさん専門書を買ってきた。  
c. \*ジョンが[メアリが 専門書を 買った]よりたくさん専門書を買ってきた。

このように、度合いを表す表現が連用修飾であるのか連体修飾であるのかという違いにおいて、比較の対象が VP 同士、あるいは NP 同士と変化することに加え、空所の義務性や連体修飾の場合の空所の解釈の制限などを踏まえると、ヨリの Merge 相手が VP となる比較構文には2種類の異なる構造のものがあると考えざるをえない。

#### 4.3. target ヨリの提案

ヨリの Merge 相手が VP となる比較構文でも、度合いを表す表現が連体修飾となっている場合、(32)を用いては、「ヨリ」が直接に比較の対象となっているヨリ句内の NP と Merge していないため、「ヨリ」が NP の意味素性を継承できず、その適切な意味を派生することができなかった。例えば、4.2 節において(32)を用いて(46)の文の派生を考えた場合、(49)のような構造となっていた。

(49) 樹形図



この構造では、x4の「ヨリ」が主要部として Merge している相手は x3の「購入した」という VP であり、「ヨリ」の attribute が「劣」となっている property の value には x3が入ることになってしまう。さらに、「度合いを表す表現」が連体修飾となっている場合は、空所の解釈が限定されるという観察も見られた。

本節では、ヨリの Merge 相手が VP となる比較構文には2種類の異なる構造があるとする帰結から、ヨリにはもう一つの形が Lexicon に存在していると主張する<sup>8</sup>。

(60) target ヨリ

{[Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)], {  
    <●, {<劣, ★target}>},  
    <★target, ◎(Theme(●))>,  
}>, より]>

この「度合いを表す表現」が連体修飾となっているヨリ比較構文では、比較の対象がヨリと構造的に姉妹関係ではないという問題がある。そこで、この問題を解決するために、1.5節で紹介した target 素性を導入する。さらに、「度合いを表す表現」が連体修飾となっているヨリ比較構文には、ヨリ句内の空所の解釈に制限があった。この問題に対処するために、ここで新たな素性を追加する。

<sup>8</sup> 以下では、2つのヨリの Lexicon を区別するために、先に出てきたヨリを「simple ヨリ」、そして度合いを表す表現が連体修飾となっている場合のヨリを「target ヨリ」と呼ぶことにする。

(61) ◎(xn)

LF 意味素性が出た段階で、xn の property の set をコピーする。

この新たなヨリを用い、(46)の Numeration を(62)として、(49)のように Merge を行うと(63)のような LF 意味表示が得られる。

(46) リンダが[ウィルが φ\_購入した]より頑丈な戸棚を取り付けた。

(62) Numeration={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7, x8}

<x1, [{N}, <x1, {<Name, リンダ>}], リンダが]>

<x2, [{NP}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが]>

<x3, [{V, +N, +N}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}], 購入した]>

<x4, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, {

<●, {<劣, ★<sub>target</sub>>}],

<★<sub>target</sub>, ◎(Theme(●))>,

}], より]>

<x5, [{A, +NP}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}], 頑丈な]>

<x6, [{NP}, <x6, {<戸棚, T>}], 戸棚を]>

<x7, [{V, +N, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}], 取り付けた]>

<x8, [{NP, <target, x8>}, <x8, {}>, φ]>

(63) LF 意味表示

<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>

<x1, {<Name, リンダ>}>

<x6, {<戸棚, T>}>

<x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>}>

<x5, {<劣, x8>}>

<x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>

<x2, {<Name, ウィル>}>

<x8, {◎(Theme(x5))}>

この LF 意味表示が出た段階で、◎(xn)素性において、xn の property の set をコピーする。ここでは、xn は x5 の Theme が取っている value、つまりは x6 であるので、x6 の property の set をコピーする。そうすることで、最終意味表示にて解釈と合致した意味表示を得る

ことができる。

(64) 最終意味表示

{<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>

<x1, {<Name, リンダ>}>

<x6, {<戸棚, T>}>

<x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>, <劣, x8>}>

<x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>

<x2, {<Name, ウィル>}>

<x8, {<戸棚, T>}>

このようにすることで、度合いを表す表現が連体修飾となっている場合のヨリ比較構文においても、意味を適切に表すことができる。



## 5. 先行研究との比較

### 5.1. 統語からアプローチ

#### 5.1.1. Operator 移動による分析

英語の比較構文の分析に関して有名なものとして Bresnan (1973) および Bresnan (1975) がある。Bresnan (1973, 1975) 以来、しばしば次の3つの比較構文が区別されてきた。

- (65) a. **NP-Comparative:** John is smarter than [Mary].  
b. **Comparative Ellipsis:** John wrote more papers than [Mary did].  
c. **Comparative Deletion:** John wrote more papers than [Mary wrote].

この3つの構文の中で、Comparative Deletion は wh 移動の特性を示すとされている。

#### (66) 空所の義務性

- a. John wrote more papers than [Mary wrote [φ]].  
b. \*John wrote more papers than [Mary wrote [papers]].  
c. \*John wrote more papers than [Mary wrote [novels]].

#### (67) Wh-islands

- a. Mercury is closer to the sun than [I thought it was [φ]].  
b. \*Mercury is closer to the sun than [I wondered [<sub>wh-island</sub> whether it was [φ]]].  
c. \*Mercury is closer to the sun than [I knew [<sub>wh-island</sub> who said it was [φ]]].

[Kennedy 1997: 184, (135)-(137)]

#### (68) Complex NPs

- a. Hale-Bopp was brighter than [Carl claimed it would be [φ]].  
b. \*Hale-Bopp was brighter than [<sub>Complex NP</sub> Carl's claim that it would be [φ]].  
c. \*Hale-Bopp was brighter than [<sub>Complex NP</sub> a paper that said it would be [φ]].

[Kennedy 1997: 184-185, (138)-(140)]

Comparative Deletion に wh 移動が関わるとすれば、(66)のように、痕跡があるはずの位置に「papers」や「novels」といった語が現れると非文になることも当然となり、(67b,c)および(68b,c)のように、than の後続部分に wh 句や複合名詞句が含まれると容認性が低くなることも予測できる。これらの特性を踏まえ、Comparative Deletion には Operator 移動が関わっていると考えられてきた (Chomsky 1977)。

Kikuchi (1989)は、日本語の Comparative Deletion についても、ヨリ句内に空所が必要であるとして、次の例を挙げている。

- (69) a. トムは[ジョンが q 読んだ]よりも本をたくさん読んだ。  
b. \*トムは[ジョンが それを 読んだ]よりも本をたくさん読んだ。  
c. \*トムは[ジョンが それらを 読んだ]よりも本をたくさん読んだ。  
d. \*トムは[ジョンが 本を 読んだ]よりも本をたくさん読んだ。

[cf. Kikuchi 1989: 4, (12)]

また、Kikuchi (1989)では、日本語の Comparative Deletion も下接の条件に従うとして、次の例を挙げている。

- (70) a. \*[[Complex NP その机で e<sub>i</sub> [ e ]読んでいた人<sub>i</sub>]をジョンが殴った]よりもポールはたくさん本を読んでいた。

[Kikuchi 1989: 4, (14)]

- b. \*[[Adjunct ジョンが[ e ]読んでいた時に]地震が起きた]よりもポールははるかにたくさん本を読んでいた。

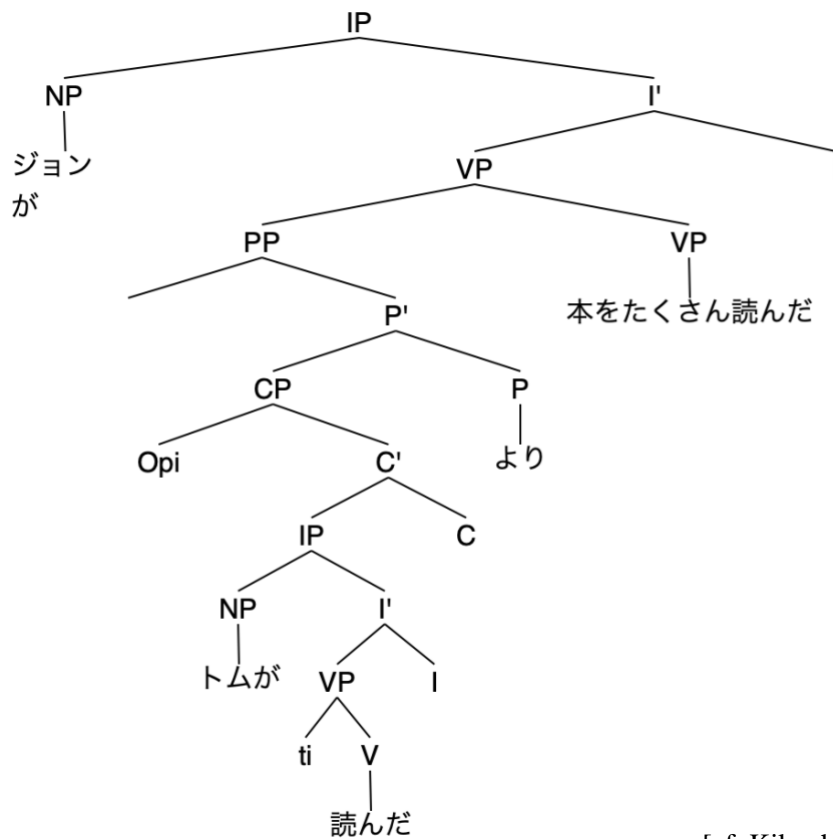
[Kikuchi 1989: 4, (15)]

- c. \*[[みんなが[Wh-clause 何故ポールが[ e ]読んだか]不思議に思ってた]よりもジョンはたくさん本を読んでいた。

[Kikuchi 1989: 6, (22)]

これらの観察に基づいて、Kikuchi (1989)および Ishii (1991)は、日本語の Comparative Deletion にも空演算子の移動が関わっていると主張し、Bresnan (1975)以来から続く Operator 移動による分析を踏襲した。

(71) ジョンが[PP [CP Opi [トムが ti 読んだ]より]本をたくさん読んだ。



[cf. Kikuchi 1989: 3, (10)]

その後、この Operator 移動を仮定した分析は日本語の比較構文における一般的な分析として浸透している。

### 5.1.2. Operator 移動分析の問題

Kikuchi (1989)では、日本語の比較構文の分析に Operator 移動分析を提案したわけだが、そもそも日本語の比較構文に対して Operator 移動を用いた分析を行うことが適切であるのかという議論がある。その問題に関して、Kikuchi (1989)が Operator 移動分析の根拠の一つとしたのが、比較構文においてヨリ句内の名詞句が空にならないといけないという観察であった。

- (69) a. トムは[ジョンが φ 読んだ]よりも本をたくさん読んだ。  
 b. \*トムは[ジョンが それを 読んだ]よりも本をたくさん読んだ。  
 c. \*トムは[ジョンが それらを 読んだ]よりも本をたくさん読んだ。  
 d. \*トムは[ジョンが 本を 読んだ]よりも本をたくさん読んだ。

[cf. Kikuchi 1989: 4, (12)]

しかし、(69d)はある程度の容認性があるように思われる。この Kikuchi (1989)の証拠の反例となったのが(58)のような「度合いを表す表現」が連用修飾となる文であった。(58)は、(69)と同様に、先行研究において Comparative Deletion として扱われてきた比較構文であるが、ヨリ句内に空所がなくても容認可能である。

- (58) a. ジョンが[メアリが φ 買った]よりたくさん、専門書を買ってきた。  
 b. ジョンが[メアリが 漫画本を 買った]よりたくさん、専門書を買ってきた。  
 c. ?ジョンが[メアリが 専門書を 買った]よりたくさん、専門書を買ってきた。

どうして容認可能になるのかという言及まではされていないが、Hayashishita (2009)でも、本論で指摘した観点と同じ例文である(72)を挙げ、日本語の比較構文が下接の条件に従うとする Kikuchi (1989)の主張に反対している。

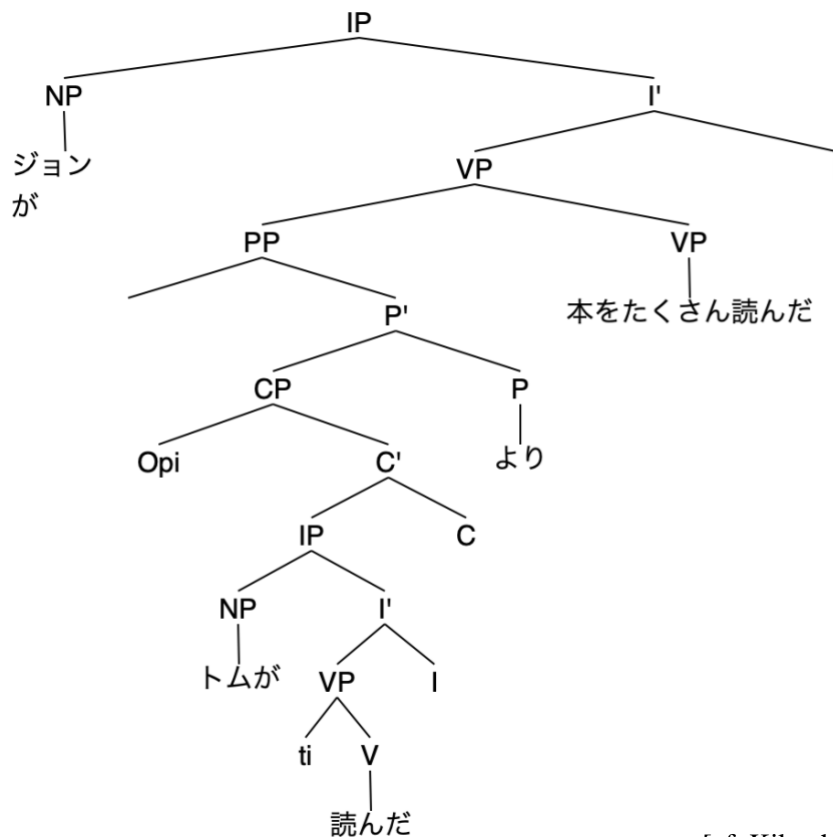
- (72) [[暗記した]英単語が全く試験に出なかった]より](もっと)かわいそうな学生がいた。

[Hayashishita 2009: 67, (5)]

したがって、日本語の比較構文において、Operator の移動を義務的とするこれまでの分析は見直す必要がある。

Operator 移動が日本語の比較構文に関与しているとして、次に問題となるのは、その働きである。(71)の場合、比較の対象となっているのは、「トムが読んだ本」である。Operator 移動による分析は、比較構文の対象となっている部分を主節から「見える」位置に持ってくる点では有用であった。

(71) ジョンが[PP [CP Opi [トムが ti 読んだ]より]本をたくさん読んだ。



[cf. Kikuchi 1989: 3, (10)]

しかしながら、Operator 移動分析では、主節から比較構文の対象となっている部分の抽出がどのように行われているのか、Operator 移動によって比較の対象を移動させた構造が、どのように比較の意味解釈を生むのかは明示的ではなく、定かではない。これは、これまでの生成文法では、樹形図そのものが「意味」を表すかのように想定されているが、樹形図そのものは文の派生を表すものであるから、語と語が組み合わさった後の「意味」が、語の「意味」にどのような影響が出たか、1つ1つ明示的に捉えられないことに起因する。統語論の操作を述べる際に、「素性の束」としての書き方はされず、表現の綴りをそのまま書いてその語彙項目を表す（代用する）ことがほとんどであり、それぞれの語彙項目がどのような働きをしているのかは明示的ではないのである。

## 5.2. 意味からのアプローチ

### 5.2.1. 意味による日英比較構文の対比

Beck et al. (2004)では、日本語と英語を対比させ、意味論の分析を行っている。その中で、(73)の日本語の文を(74)の英語の文に意味を変えずに英訳することができるということを挙げている。日本語での容認性が低い文であれば、英語訳に変換した場合にも同様に容認

性が下がるとしている。

(73) a. ?\*太郎は[[花子買った]より (も) ]長い傘を買った。  
[Beck et al 2004: 290, (4a)]

b. 太郎は[[花子買った]より]高い傘を買った。  
[Beck et al 2004: 302, (43a)]

(74) a. ?Compared to what Hanako bought, Taro bought a long umbrella.  
[Beck et al 2004: 300, (37b)]

b. Compared to what Hanako bought, Taro bought an expensive umbrella.  
[Beck et al 2004: 302, (43b)]

この観察から、ヨリがその意味的な特性として常に *individual* を取るとする分析を主張した。<sup>9</sup>

(75) The complement of *yor*i always denotes an individual.

ヨリの補部を  $\alpha$  として、日本語の比較構文について以下のように分析をしている。

(76) 補部に *gap* があり、「の」なし。 $\alpha$  は *free relative* である。

a. メアリーは[[ジョンが  $\phi$  書いた]より]長い論文を書いた。

b. [[ $\alpha$ ]] $\equiv$ what John wrote

[cf. Beck et al 2004: 301, (42)]

(77) 補部に *gap* があり、「の」あり。 $\alpha$  は「の」が主要部となる '*regular*' externally-headed relative clause である。

a. メアリーは[[ジョンが  $\phi$  書いたの]より]長い論文を書いた。

b. [[ $\alpha$ ]] $\equiv$ the one John wrote

[cf. Beck et al 2004: 301, (68)]

(78) 補部に *gap* がなく、「の」なし。 $\alpha$  は *nominalized sentence* である。

a. メアリーは[[ジョンが論文を書いた]より]長い論文を書いた。

b. [[ $\alpha$ ]] $\equiv$ John's writing a paper

---

<sup>9</sup> この主張は Hayashishita (2009)によるものである。

[cf. Beck et al 2004: 304, (48) (49)]

- (79) 補部に gap がなく、「の」あり。 $\alpha$  は internally-headed relative clause である。  
a. メアリーは[[ジョンが論文を書いたの]より]長い論文を書いた。  
b. [[ $\alpha$ ]]=*the paper John wrote*

[cf. Beck et al 2004: 310, (70)]

ところが、Beck et al. (2004)に対して、Hayashishita (2009)では、ヨリが取るものの意味範疇は degree、individual、proposition の3つがあると主張している。

- (80) The denotation of the complement of *yor*i is (i) a degree, (ii) an individual, or (iii) a proposition.

[Hayashishita 2009: 79, (35)]

- (81) Degree: この竿は[規定の 10cm より]長い。

[Hayashishita 2009: 79, (34a)]

Individual: メアリーは[ジョンより]長い本を読んだ。

[Hayashishita 2009: 69, (11)]

Proposition: 太郎が[メアリーにより先に]スーザンに論文を発表させた（としよう）。

[Hayashishita 2009: 76, (27a)]

Beck et al. (2004)による対比の分析では、見落とされていた日本語の例も多くある。

### 5.2.2. ファクトリゼーションでの分析

日本語の比較構文の研究において、GB 理論以前の枠組みを用いた研究として K. Harada (1974)が挙げられる。K. Harada (1974)では、(82)を仮定し、(83)が日本語の比較構文の構造であるとしている。

- (82) ヨリは常に Sentence を取る。

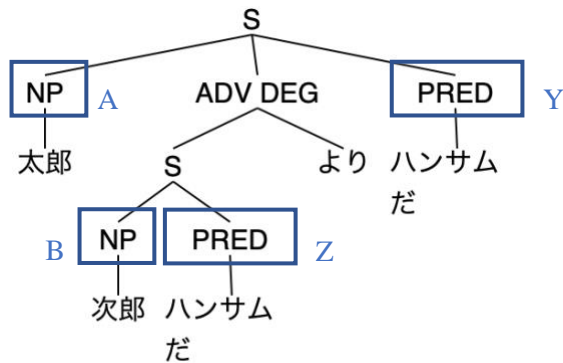
- (83)
- |                          |   |   |   |
|--------------------------|---|---|---|
| Main Sentence (minus TP) | X | A | Y |
| Embedded Sentence        | W | B | Z |
- where  $X=W$ ,  $Y=Z$ , but  $A \neq B$ .

例えば、次の(84)が(85)の構造を持つ文であると分析する。

(84) 太郎は次郎よりハンサムだ。

[Harada 1974: 77, (1a)]

(85) 太郎は<sub>S</sub> [次郎 ハンサムだ]よりハンサムだ。



[cf. Harada 1974: 77, (2)]

K. Harada (1974)では、(85)のように、主文の全体あるいは一部分をヨリの前に埋め込む構造を仮定することによって、比較構文の意味を反映した統語構造の分析を行なっている。

(82)や(83)を仮定する根拠として、次の(86)が挙げられている。

- (86) a. \*太郎は空気より幸せだ。  
 b. \*太郎は<sub>S</sub> [空気 幸せだ]より幸せだ。

[Harada 1974: 82, (21a)]

(86)では、ヨリ句内の名詞句「空気」と「幸せだ」との選択制限が満たされていないために、非文となるという主張をしている。

この K. Harada (1974)での分析は、比較構文の意味を考えた際に、音あるいは文字として直接に観察出来ない意味を明示的に述べたという点に関しては評価すべきところがある。しかし、Hayashishita (2009)で挙げられている例から、仮定(82)が適切でないことがわかる。

(87) この竿は[規定の 10cm]より長い。

[Hayashishita 2009: 79, (34)]

さらに、次の文のように、主文と同じ埋め込み文を想定できない文も多く観察され、その分析には工夫が必要である。



(88) 太郎は花子がピアノを弾くより上手にバイオリンを弾く。

### 5.3. 統語意味論によるアプローチの利点

このように先行研究が様々な問題を抱えているのは、それぞれの語彙項目がどのような素性の束であるかをはっきりと定義しないまま、統語操作を仮定することに起因している。その点でいえば、統語意味論は、それぞれの語彙項目がどのような素性の束であるかをはっきりと定義していることによって、1つ1つの派生の操作が非常に明示的に行うことができるという強みがある。

## 6. おわりに

本論文では、日本語比較構文におけるヨリがどのような特性をもった語彙であるかについて、ヨリを用いた日本語の比較構文を考察した。その結果、ヨリという語彙は「比較の参照点」と「度合いを表す表現」の2つを選択する特性を持っており、優劣や差異を決定する property を「度合いを表す表現」である object に持たせるという特性があることがわかった。さらに、「度合いを表す表現」が連用修飾か連体修飾かという違いで、ヨリ句内の空所の義務性や空の解釈が異なっている事実から、連用形の場合は、その度合いがデキゴト (VP) の持つ特性であり、連体形の場合は、その度合いがモノ (NP) の持つ特性であるというように、ヨリを2種類に区別しなければならないことを主張した。また、これら2種類のヨリを統語意味論による道具立てによって分析し、(32)、(60)の形で Lexicon に登録されていることを提案した。

(32) ヨリ

[{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]

(89) target ヨリ

[{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, {  
<●, {<劣, ★<sub>target</sub>>}>,  
<★<sub>target</sub>, ◎(Theme(●))>,  
}>, より]

(90) ◎(xn)

LF 意味素性が出た段階で、xn の property の set をコピーする。



## 7. Appendix

### 7.1. ジョンはトムより賢い

(91) Numeration={x1, x2, x3, x4}

<x1, [{N, +V}, <x1, {<Name, ジョン>}>, ジョンは]>  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, トム>}>, トム]>  
<x3, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]>  
<x4, [{A, +N}, <x4, {<賢い, T>, <Theme, ★>}>, 賢い]>

(92) Merge base={x1, x2, x3, x4}

<x2, [{N}, <x2, {<Name, トム>}>, トム]>  
<x3, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]>

⇒ Merge

<x3, [{Z, +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, トム>}>, トム]>  
<x3, [φ, φ, より]>  
>]>

(93) Merge base={x1, x3, x4}

<x3, [{Z, +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, トム>}>, トム]>  
<x3, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x4, [{A, +N}, <x4, {<賢い, T>, <Theme, ★>}>, 賢い]>

⇒ Merge

<x4, [{A, +N}, <x4, {<賢い, T>, <Theme, ★>}>, <  
<x3, [{Z}, <x4, {<劣, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, トム>}>, トム]>  
<x3, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, 賢い]>  
>]>

(94) Merge base={x1, x4}

```
<x1, [{N, +V}, <x1, {<Name, ジョン>}>, ジョンは]>
<x4, [{A, +N}, <x4, {<賢い, T>, <Theme, ★>}>, <
  <x3, [{Z}, <x4, {<劣, x2>}>, <
    <x2, [{N}, <x2, {<Name, トム>}>, トム]>
    <x3, [φ, φ, より]>
  >]>
  <x4, [φ, φ, 賢い]>
>]>
```

⇒ Merge

```
<x4, [{A}, <x4, {<賢い, T>, <Theme, x1>}>, <
  <x1, [{N}, <x1, {<Name, ジョン>}>, ジョンは]>
  <x4, [φ, φ, <
    <x3, [{Z}, <x4, {<劣, x2>}>, <
      <x2, [{N}, <x2, {<Name, トム>}>, トム]>
      <x3, [φ, φ, より]>
    >]>
    <x4, [φ, φ, 賢い]>
  >]>
>]>
```

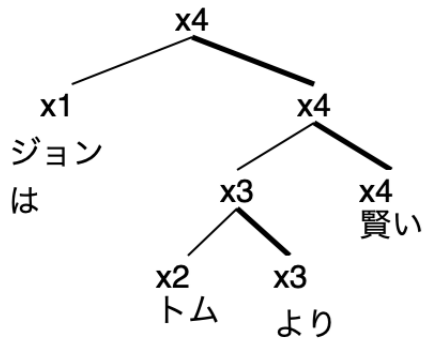
(95) LF 意味表示

```
<x4, {<賢い, T>, <Theme, x1>}>
<x1, {<Name, ジョン>}>
<x2, {<Name, トム>}>
<x4, {<劣, x2>}>
```

(96) 最終意味表示

```
{<x4, {<賢い, T>, <Theme, x1>, <劣, x2>}>,
  <x1, {<Name, ジョン>}>,
  <x2, {<Name, トム>}>}
```

(97) 樹形図



7.2. 100 は 1 より大きい

(98) Numeration={x1, x2, x3, x4}

<x1, [{N, +V}, <x1, {<数値, T>, <Degree, 100>}], 100 は]>

<x2, [{N}, <x2, {<数値, T>}], <Degree, 1>]>

<x3, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}], より]>

<x4, [{A, +N}, <x4, {<大きい, T>, <Theme, ★>}], 大きい]>

(99) Merge base={x1, x2, x3, x4}

<x2, [{N}, <x2, {<数値, T>, <Degree, 100>}], 100]>

<x3, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}], より]>

⇒ Merge

<x3, [{Z, +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, x2>}], <

<x2, [{N}, <x2, {<数値, T>, <Degree, 1>}], 1]>

<x3, [φ, φ, より]>

>]>

(100) Merge base={x1, x3, x4}

<x3, [{Z, +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<数值, T>, <Degree, 1>}>, 1]>  
<x3, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x4, [{A, +N}, <x4, {<大きい, T>, <Theme, ★>}>, 大きい]>

⇒ Merge

<x4, [{A, +N}, <x4, {<大きい, T>, <Theme, ★>}>, <  
<x3, [{Z}, <x4, {<劣, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<数值, T>, <Degree, 1>}>, 1]>  
<x3, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, 大きい]>  
>]>

(101) Merge base={x1, x4}

<x1, [{N, +V}, <x1, {<数值, T>, <Degree, 100>}>, 100 は]>  
<x4, [{A, +N}, <x4, {<大きい, T>, <Theme, ★>}>, <  
<x3, [{Z}, <x4, {<劣, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<数值, T>, <Degree, 1>}>, 1]>  
<x3, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, 大きい]>  
>]>

⇒ Merge

<x4, [{A}, <x4, {<大きい, T>, <Theme, x1>}>, <  
<x1, [{N}, <x1, {<数值, T>, <Degree, 100>}>, 100 は]>  
<x4, [φ, φ, <  
<x3, [{Z}, <x4, {<劣, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<数值, T>, <Degree, 1>}>, 1]>  
<x3, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, 大きい]>  
>]>  
>]>

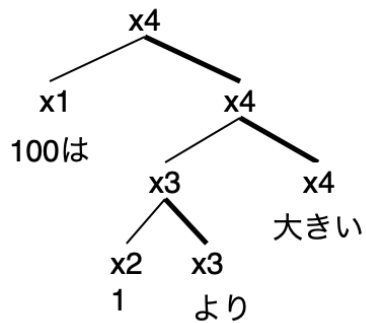
(102) LF 意味表示

<x4, {<大きい, T>, <Theme, x1>}>  
<x1, {<数值, T>, <Degree, 100>}>  
<x2, {<数值, T>, <Degree, 1>}>  
<x4, {<劣, x2>}>

(103) 最終意味表示

{<x4, {<大きい, T>, <Theme, x1>, <劣, x2>}>,  
<x1, {<数值, T>, <Degree, 100>}>,  
<x2, {<数值, T>, <Degree, 1>}>}

(104) 樹形図



7.3. リンダがウィルが固定したより頑丈に、戸棚を取り付けた

(105) Numeration={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7}

<x1, [{N}, <x1, {<Name, リンダ>}], リンダが]>

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが]>

<x3, [{V, +N, +N}], <x3, {<固定した, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}], 固定した]>

<x4, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}], より]>

<x5, [{A, +V}], <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}], 頑丈に]>

<x6, [{N}], <x6, {<戸棚, T>}], 戸棚を]>

<x7, [{V, +N, +N}], <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}], 取り付けた]>

(106) Merge base={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7}

<x3, [{V, +N, +N}], <x3, {<固定した, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}], 固定した]>

⇒ zero-Merge

<x3, [{V, +N}], <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, ★>}],

<x8, [{N}], <x8, { }], φ],

<x3, [φ, φ, 固定した]>

>]>



(107) Merge base={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7}

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが<]>

<x3, [{V, +N}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, ★>}], <

<x8, [{N}, <x8, { }>, φ], <

<x3, [φ, φ, 提案した]>

>]>

⇒ Merge

<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}], <

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが<]>

<x3, [φ, φ,

<x8, [{N}, <x8, { }>, φ], <

<x3, [{V}, φ, 提案した]>

>]>

>]>

(108) Merge base={x1, x3, x4, x5, x6, x7}

<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>, <

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウイル>}>, ウイルが]>

<x3, [φ, φ,

<x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>,<

<x3, [{V}, φ, 提案した]>

>]>

>]>

<x4, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, ★>}>, より]>

⇒ Merge

<x4, [{Z, +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, x3>}>, <

<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>, <

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウイル>}>, ウイルが]>

<x3, [φ, φ,

<x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>,<

<x3, [{V}, φ, 提案した]>

>]>

>]>

<x4, [φ, φ, より]>

>]>

(109) Merge base={x1, x4, x5, x6, x7}

<x4, [{Z, +(left)(nonhead)}, <●, {<劣, x3>}>, <  
<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウイル>}>, ウイルが]>  
<x3, [φ, φ,  
<x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>, <  
<x3, [{V}, φ, 提案した]>  
>]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x5, [{A, +V}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}>, 頑丈に]>

⇒ Merge

<x5, [{A, +V}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}>, <  
<x4, [{Z}, <x5, {<劣, x3>}>, <  
<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>, <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウイル>}>, ウイルが]>  
<x3, [φ, φ,  
<x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>, <  
<x3, [{V}, φ, 提案した]>  
>]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x5, [φ, φ, 頑丈に]>  
>]>

(110) Merge base={x1, x5, x6, x7}

<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}>, 戸棚を]>

<x7, [{V, +N, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}>, 取り付けた]>

⇒ Merge

<x7, [{V, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, ★>}>, <

<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}>, 戸棚を]>

<x7, [φ, φ, 取り付けた]>

>]>

(111) Merge base={x1, x5, x7}

<x5, [{A, +V}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}], <  
<x4, [{Z}, <x5, {<劣, x3>}], <  
<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}], <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウイル>}], ウイルが]>  
<x3, [φ, φ,  
<x8, [{N}, <x8, { }], φ],  
<x3, [{V}, φ, 提案した]>  
>]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x5, [φ, φ, 頑丈に]>  
>]>  
<x7, [{V, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, ★>}], <  
<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}], 戸棚を]>  
<x7, [φ, φ, 取り付けた]>  
>]>

⇒ Merge

<x7, [{V, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, ★>}], <  
<x5, [{A}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x7>}], <  
<x4, [{Z}, <x5, {<劣, x3>}], <  
<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}], <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウイル>}], ウイルが]>  
<x3, [φ, φ,  
<x8, [{N}, <x8, { }], φ],  
<x3, [{V}, φ, 提案した]>  
>]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x5, [φ, φ, 頑丈に]>  
>]>  
<x7, [φ, φ, <  
<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}], 戸棚を]>

<x7, [φ, φ, 取り付けた]>

>]>

>]>

(112) Merge base={x1, x7}

<x1, [{N}, <x1, {<Name, リンダ>}], リンダが]>  
<x7, [{V, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, ★>}], <  
<x5, [{A}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x7>}], <  
<x4, [{Z}, <x5, {<劣, x3>}], <  
<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}], <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが]>  
<x3, [φ, φ,  
<x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>,  
<x3, [{V}, φ, 提案した]>  
>]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, より]>  
>]>  
<x5, [φ, φ, 頑丈に]>  
>]>  
<x7, [φ, φ, <  
<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}], 戸棚を]>  
<x7, [φ, φ, 取り付けた]>  
>]>  
>]>

⇒ Merge

<x7, [{V}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}], <  
<x1, [{N}, <x1, {<Name, リンダ>}], リンダが]>  
<x7, [φ, φ, <  
<x5, [{A}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x7>}], <  
<x4, [{Z}, <x5, {<劣, x3>}], <  
<x3, [{V}, <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}], <  
<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが]>  
<x3, [φ, φ,  
<x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>,  
<x3, [{V}, φ, 提案した]>  
>]>  
>]>  
<x4, [φ, φ, より]>

>|>  
 <x5, [φ, φ, 頑丈に]>  
 >|>  
 <x7, [φ, φ, <  
 <x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}>, 戸棚を]>  
 <x7, [φ, φ, 取り付けた]>  
 >|>  
 >|>  
 >|>

(113) LF 意味素性

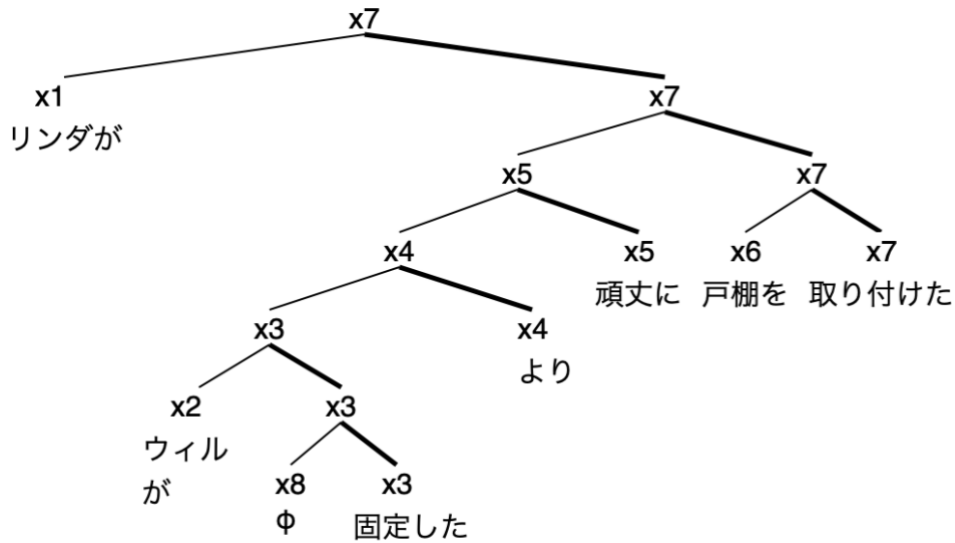
<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>  
 <x1, {<Name, リンダ>}>  
 <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x7>}>  
 <x5, {<劣, x3>}>  
 <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>  
 <x2, {<Name, ウィル>}>  
 <x8, { }>  
 <x6, {<戸棚, T>}>

(114) 最終意味表示

{<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>,  
 <x1, {<Name, リンダ>}>,  
 <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x7>, <劣, x3>}>,  
 <x3, {<固定した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>,  
 <x2, {<Name, ウィル>}>,  
 <x8, { }>,  
 <x6, {<戸棚, T>}>}



(115) 樹形図



7.4. リンダがウィルが購入したより頑丈な戸棚を取り付けた

(116) Numeration={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7, x8}

- <x1, [{N}, <x1, {<Name, リンダ>}], リンダが]>
- <x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが]>
- <x3, [{V, +N, +N}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}], 購入した]>
- <x4, [{Z, +(right)(head), +(left)(nonhead)}, {
  - <●, {<劣, ★<sub>target</sub>>}],
  - <★<sub>target</sub>, ◎(Theme(●))>,
    - >], より]>
- <x5, [{A, +NP}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}], 頑丈な]>
- <x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}], 戸棚を]>
- <x7, [{V, +N, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}], 取り付けた]>
- <x8, [{N, <target, x8>}], <x8, {}>, φ]>

(117) Merge base={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7, x8}

- <x3, [{V, +N, +N}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}], 購入した]>

⇒ Merge

- <x3, [{V, +N, <target, x8>}], <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, ★>}],
  - <x8, [{N}, <x8, {}>, φ],
  - <x3, [φ, φ, 購入した]>

>]>

(118) Merge base={x1, x2, x3, x4, x5, x6, x7}

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが<]>

<x3, [{V, +N, <target, x8>}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, ★>}], <

<x8, [{N}, <x8, { }>, φ], <

<x3, [φ, φ, 購入した]>

>]>

⇒ Merge

<x3, [{V, <target, x8>}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}], <

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが<]>

<x3, [φ, φ, <

<x8, [{N}, <x8, { }>, φ], <

<x3, [φ, φ, 購入した]>

>]>

>]>



(120) Merge base={x1, x4, x5, x6, x7}

<x5, [{A, +NP}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}>, 頑丈な]>

<x4, [{Z, +(left)(nonhead)}, {

<●, {<劣, x8>}>,>

<x8, ◎(Theme(●))>,>

>], <

<x3, [{V, <target, x8>}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>], <

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}>, ウィルが]>

<x3, [φ, φ,

<x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>,>

<x3, [φ, φ, 購入した]>

>]>

>]>

<x4, [φ, φ, より]>

>]>

⇒ Merge

<x5, [{A, +NP}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, ●>}>, <

<x5, [φ, φ, 頑丈な]>

<x4, [{Z}, {

<x5, {<劣, x8>}>,>

<x8, ◎(Theme(x5))>,>

>], <

<x3, [{V, <target, x8>}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>], <

<x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}>, ウィルが]>

<x3, [φ, φ,

<x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>,>

<x3, [φ, φ, 購入した]>

>]>

>]>

<x4, [φ, φ, より]>

>]>

>]>



>]>  
 <x6, [φ, φ, 戸棚を]>  
 >]>

(122) Merge base={x1, x6, x7}

<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}>, <  
 <x5, [{A}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>}>, <  
 <x5, [φ, φ, 頑丈な]>  
 <x4, [{Z}, {  
 <x5, {<劣, x8>}>, <  
 <x8, ◎(Theme(x5))>, <  
 }>, より]>, <  
 <x3, [{V, <target, x8>}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>, <  
 <x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}>, ウィルが]>  
 <x3, [φ, φ,  
 <x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>, <  
 <x3, [φ, φ, 購入した]>  
 >]>  
 >]>  
 <x4, [φ, φ, より]>  
 >]>  
 >]>  
 <x6, [φ, φ, 戸棚を]>  
 >]>  
 <x7, [{V, +N, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, ★>, <Agent, ★>}>, 取り付けた]>

⇒ Merge

<x7, [{V, +N}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, ★>}>, <  
 <x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}>, <  
 <x5, [{A}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>}>, <  
 <x5, [φ, φ, 頑丈な]>  
 <x4, [{Z}, {  
 <x5, {<劣, x8>}>, <  
 <x8, ◎(Theme(x5))>, <  
 }>, より]>, <  
 <x3, [{V, <target, x8>}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>, <



<  
     <x2, [{N}, <x2, {<Name, ウィル>}], ウィルが]>  
     <x3, [φ, φ,  
         <x8, [{N}, <x8, { }>, φ],  
         <x3, [φ, φ, 購入した]>  
     ]>  
     >]>  
     <x4, [φ, φ, より]>  
     >]>  
     >]>  
     <x6, [φ, φ, 戸棚を]>  
     >]>  
     <x7, [φ, φ, 取り付けた]>  
     >]>

⇒ Merge

<x7, [{V}, <x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}], <

<x1, [{N}, <x1, {<Name, リンダ>}], リンダが]>

<x7, [φ, φ, <

<x6, [{N}, <x6, {<戸棚, T>}], <

<x5, [{A}, <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>}], <

<x5, [φ, φ, 頑丈な]>

<x4, [{Z}, {

<x5, {<劣,

x8>}],

<x8,

◎(Theme(x5))>],

]>, より]>],

<

<x3, [{V, <target, x8>}, <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent,



x2>}>, <  
     <x2, [{N}, <x2, {<Name, ウイル>}>, ウイルが]>  
     <x3, [φ, φ,  
         <x8, [{N}, <x8, { }>, φ]>,  
         <x3, [φ, φ, 購入した]>  
     ]>  
     ]>  
     <x4, [φ, φ, より]>  
     ]>  
     ]>  
     <x6, [φ, φ, 戸棚を]>  
     ]>  
     <x7, [φ, φ, 取り付けた]>  
     ]>  
     ]>

(124) LF 意味表示

<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>  
 <x1, {<Name, リンダ>}>  
 <x6, {<戸棚, T>}>  
 <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>}>  
 <x5, {<劣, x8>}>  
 <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>  
 <x2, {<Name, ウイル>}>  
 <x8, {◎(Theme(x5))}>

(125) 最終意味表示

{<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>  
   <x1, {<Name, リンダ>}>  
   <x6, {<戸棚, T>}>  
   <x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>, <劣, x8>}>  
   <x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>  
   <x2, {<Name, ウイル>}>  
   <x8, {<戸棚, T>}>}

(126) LF 意味表示

<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>  
<x1, {<Name, リンダ>}>  
<x6, {<戸棚, T>}>  
<x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>}>  
<x5, {<劣, x8>}>  
<x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>  
<x2, {<Name, ウィル>}>  
<x8, {◎(Theme(x5))}>

この LF 意味表示が出た段階で、◎(xn)素性において、xn の property の set をコピーする。ここでは、xn は x5 の Theme が取っている value、つまりは x6 であるので、x6 の property の set をコピーする。そうすることで、最終意味表示にて解釈と合致した意味表示を得ることができる。

(127) 最終意味表示

{<x7, {<取り付けた, T>, <Theme, x6>, <Agent, x1>}>  
<x1, {<Name, リンダ>}>  
<x6, {<戸棚, T>}>  
<x5, {<頑丈, T>, <Theme, x6>, <劣, x8>}>  
<x3, {<購入した, T>, <Theme, x8>, <Agent, x2>}>  
<x2, {<Name, ウィル>}>  
<x8, {<戸棚, T>}>}

## 参照文献

- Beck, Sigrid, Toshiko Oda and Koji Sugisaki (2004) Parametric variation in the semantics of comparison: Japanese vs. English. *Journal of East Asian Linguistics* 13: 289-344.
- Bresnan, Joan (1973) Syntax of the Comparative Clause Construction in English. *Linguistic Inquiry* 4-3: 275-343.
- Bresnan, Joan (1975) Comparative Deletion and Constraints on Transformations. *Linguistic Analysis* 1: 25-74.
- Chomsky, Noam (1977) On Wh-Movement. In: Peter Culicover, Thomas Wasow, and Adrian Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, 71-132. New York: Academic Press.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.
- Harada, Kazuko I. (1974) On the Japanese Comparative Construction. *Descriptive and Applied Linguistics* 7, pp.77-101.
- Hayashishita, J.-R. (2009) *Yori-comparatives: A reply to Beck et al. (2004)*. *Journal of East Asian Linguistics* 18: 65-100.
- Ishii, Yasuo (1991) *Operators and Empty Categories in Japanese*, Doctoral dissertation, The University of Connecticut.
- Ishii, Yasuo (1993) On Certain Differences in Comparative Deletion Between English and Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 2: 375-393.
- Kennedy, Christopher (1997) *Projecting the Adjective: The Syntax and Semantics Gradability and Comparison*, Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz, distributed by SLUG Pubs, USCS.
- Kikuchi, Akira. (1989) *Comparative deletion in Japanese*. Unpublished manuscript. Yamagata university.
- 東寺祐亮 (2015) 「意味とスケール：度合いが関わる表現の統語論」博士論文，九州大学。
- 東寺祐亮 (2018) 「V スギル構文の統語的条件と解釈」，『日本語文法』18 卷 1 号, pp.3-18.
- 上山あゆみ (2015) 『統語意味論』，名古屋，名古屋大学出版